

## わたしたちの羊飼い

(ヨハネ一〇・一〜二二)

以下はあるSNSで見た投稿。タイトルは「牛の見分け方」。酪農の世界に飛び込んでまだ4日目の新参者と自らを紹介し、素人が牛を見分けるためのコツを教えてほしいと頼んでいる。「自分はどの牛を見ても同じに見えてしまいます」の後に続く泣き顔の顔文字が何ともせつない。回答も様々。「特徴のある模様の牛を中心に覚えよ」とか「入寮や顔つき、性格などの情報を組み合わせよ」などという合理的なものもあれば、「牛は牛を見て覚えよ」という少々禅問答的なものも。しかし一人前になれば百頭いても顔だけでも見分けられるという。全くすごいものである。

閑話休題。ヨハネ福音書においてイエスは自らをいろいろなものになぞらえており、「いのちのパン（六章）」「世の光（八章）」などについてはすでに学んだ。今朝は自らを「羊飼い」になぞらえたイエスの真意に迫ってみたい。

## 一．「いのち」に導く羊飼い

羊飼いと強盗の違いを端的に説明

したのち、イエスは羊飼いと羊の関係を描写している。まず羊飼いはその群れの一匹一匹を名前で呼ぶという。つまり個々を正しく認知しているということになる。実際、この福音書の中においてイエスはピリポ（一四章）、ペテロ（二一章）などその名で呼んでおられるし、第三福音書においてはザアカイのケースなどもある。要はイエスは私たちのことを一把一絡げにしないということだ。羊飼いはまた羊を先導する。これは羊が先導者に従う傾向が強いことを見越してのことであるが、その際にも声をかけることを忘れない。それは関係を保つためである。最近の研究によれば羊は巷間言われるほど愚かではなく、人や他の羊の顔を何年でも記憶出来るという。古代の羊飼いはそのことを体験的に知っていた。だからこそ彼らを名前で呼び、声をかける。そこには永遠のいのちへと信徒を適切なコミュニケーションによって導く救い主の愛の配慮が満ち溢れている。

## 二．「いのち」を捨てる羊飼い

一節以下においてイエスは自らをよい羊飼いと呼び、そのことを明確にするために羊飼いと雇い人を比較する。雇い人というのはどこまで行っても「雇われ」。彼らにとって羊は対価とともに任されたものに過ぎない。だからいざと言

う時には、自らのいのちを守るために逃げてしまう。またエレミヤ書二三章などにはかつてイスラエルを治めた王たちは悪い羊飼いと断罪されるとともに、悪い羊飼いたちによって散らされた羊の群れ、即ちイスラエルを再び集める公義と正義を行うメシア的な王の存在が預言されている。イエスはここで、すでにあるメシア的な羊飼いのイメージに犠牲の概念を加える。前述したとおり、良い羊飼いは羊との間に愛と言う名の絆をもつ。それゆえ彼は羊のためにいのちを捨てることを厭わない。それはまたよき羊飼いであるイエスを遣わしたお方の御心に適ってもいるのだ（一七節）。

## 三．「いのち」へ呼び寄せる羊飼い

一六節にあるイエスが呼び寄せようとする「この囲いに属さないほかの羊」とは誰を指すのだろうか。学者たちは御子イエスの生涯と後の教会の発展を考え、異口同音にこれはいわゆる非ユダヤ人を指すと考える。イエスの行動範囲はパレスチナに限定されていたが、それはイエス自身が狭隘な民族主義者であることを意味しない。事実はいわゆる逆だ。彼はサマリヤの女に福音を語り、罪人と目されているあの生まれつき目の見えない盲人をいやした。更にイエスが自らの時が来たことを悟ったのは、改宗者のギリシヤ人たちがイエスを尋ねて来た

時である（十二章）。イエスの目はすでにあるユダヤ人という群れにだけ向けられていたのではなかった。彼の脳裏には自らの宣教の終わりとともににはじまる世界宣教、更にはユダヤ人と異邦人の壁を破る「一つの福音」のイメージがすでに出来上がっていたのである。

\* \* \*

いよいよ第六回日本伝道会議である。一八〇〇人を超える参加者が国内外から一堂に会し、宣教とその諸課題について学び、また語り合う時を持つ。素晴らしいことだと思う。また今回の主講師であるクリストファー・ライト博士の著書を私たちの立木信恵先生が翻訳され、この期間中に世に問われるということは私たちに誇らしく、うれしいことである。伝道について考え、学び、語り合う。これらはみな有意義なことだ。しかし伝道は座して語って出て出来ることではない。イエスが自らを羊飼いにたとえたことを思い起こそう。その姿は、名前を呼び、声をかけ、教会を真理へと導き、命を捨て、そしてこのことを知らないものにも語り掛ける働く者の姿だ。この素晴らしいイエスの姿を宣べ伝える最短の道は聖霊に助けられてイエスの救いを語り、イエスのごとく労することである。失敗を恐れる必要は全くない。救うのはイエス様だ。 *Jesus Saves!*